

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00826

研究課題名(和文) 同じタスクを繰り返す練習の有効性に影響を与える要因に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Factors Influencing the Effectiveness of Practice Using Task Repetition

研究代表者

伊達 正起 (DATE, Masaki)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成)・教授

研究者番号：30259858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：発話タスクを繰り返す練習により、練習後に遂行する発話タスクの流暢さが向上することがわかっている。本研究は、この練習の有効性を高めたり、低くする要因について調べた。その結果、以下が明らかになった。最初に日本語で発話することで、直後の英語による発話が流暢になった。そして、日本語による発話を用いた練習が、発話の流暢さの育成に有効であった。さらに、開いたタスク(あるトピックについて発話する)を使った練習の効果が、練習後に閉じたタスク(6コマ漫画でストーリーを作成し発話する)を遂行する際に現れた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、まず日本語でタスクを行うことが、直後の英語による発話における概念化の役割を果たし発話が流暢になり、そうした練習を行うことで発話の流暢さ育成に有効であることが分かった。このことは、日本語での発話が、学習者の言いたいことが言えないという心理的負担を軽減するだけでなく、手続き化という認知メカニズムの変化にも有効であることを示す。また、一語で表示されるトピックを使ったタスクの有効性も示された。これは、教師が時間を割いてタスク用の配布教材の準備をしなくても、一語程度のトピックを用意すればよいということを示唆し、準備の負担から発話タスクを敬遠する教師にも取り入れやすいと思われる。

研究成果の概要(英文)：It has been revealed that practice using task repetition improves fluency of speaking after the practice. This study examined factors which make the effectiveness of such practice higher or lower.

The results showed that speaking in Japanese first made learners speak English more fluently when they performed the same task in English immediately after and that such practice using Japanese was also effective for developing fluency of speaking after the practice. Furthermore, the effectiveness for fluency of practice using an open task (talking about a set topic in English) was evident in learners then performing a closed task (making and telling a story from six-strip cartoon) after the practice.

研究分野：人文学

キーワード：タスク繰り返し タスク練習 流暢さ 日本語使用 タスクタイプ 効果の転移

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Ellis (2005) がタスク時のプランニング効果を論じて以降、プランニングの一種であるタスクの繰り返しの焦点をあてた研究が行われ、1回目に比べて2回目のタスク・パフォーマンスが向上することが判明した。さらに、タスクを繰り返す練習による学習者の第二言語に関する知識の変化に焦点をあてた研究もされている。例えば、De Jong and Perfetti (2011) は認知メカニズムの変化を示す手続き化に注目し、タスクの繰り返しは学習者の発話の流畅さを向上させるのか調べた。そして、タスク繰り返しは手続き化を引き起こした可能性を結論づけている。一方、学習者が注意を向けるべきことに関する指導がない場合には正確さが向上しない点(Bygate, 2001)や、タスク前に注意を向ける形式を指導することで学習者にタスク中にその形式を意識させる点(Sangarun, 2005)に注目した伊達は、タスクを繰り返す練習は学習者の言語運用能力の促進に有効であるとともに、練習時における形式指導が運用能力の促進に影響する可能性があることを明らかにした(Date, 2015; Date & Takatsuka, 2013)。しかし、形式指導以外にも、タスクを繰り返す練習がもたらす効果に影響を与える可能性がある要因が2つ考えられる。

(1) 1回目の発話時における母語使用

タスクを繰り返す際、1回目の発話の役割は概念化(意味内容の構築)であり、このプロセスを踏むことで発話者は2回目の発話時に形式化(内容を表す形式を選択)へ注意量を割くことができ、結果として良いパフォーマンスが可能になる(Bygate, 2001)と主張されている。さらに、タスク・レディネスが学習者の発話を向上させるための重要な要因であり、タスクの繰り返しやトピックに精通(背景知識)などいくつかの側面から構成される(Bui, 2014)ことが提案されている。そして、トピックの精通が発話に及ぼす影響に関する研究が主に行われている。しかし、トピックの精通とタスクの繰り返しの比較のような、タスク・レディネスに関わる変数の関係性に焦点をあてた研究はあまりなされていない(Qiu & Yi Lo, 2017)。また、トピックの精通がスキル発達に及ぼす影響についてあまり研究はされていない。学習者が母語で発話することによりトピックに精通し、それがその後の英語による発話における概念化に通じると考えられる。さらに、学習者にとって、最初に英語で発話内容を考えるよりも、母語で発話し内容を考える方が容易であり、2回目の発話前に概念化を行う点ではより有効的であると考えられる。

(2) 発話タスクのタイプ

先行研究の多くは、参加者が一人で漫画や映像といった資料を使って物語を作り語る(物語タスク)という単方向タスクを使用する。近年は、タスクの現実性や学習者の意欲向上という観点から、ペアで情報交換や問題解決する双方向タスクを使ったタスク繰り返しの練習効果に焦点をあてる研究(江口・田村, 2018)も行われており、タスクの形態が学習者の発話に及ぼす影響が注目されている。タスクには、物語タスクのように、発話内容が使用する資料内に埋め込まれ学習者はその内容のみを発話するため、学習者間における発話内容にあまり違いがない閉じたタスクと、発話する内容は与えられず学習者自身が考えるため、学習者間における発話内容に違いがある開いたタイプがある。閉じたタスクに比べ、発話内容を一から考えることが求められる開いたタスクの方が、概念化に対する学習者の負荷が大きいと考えられ、こうしたタスクのタイプの違いは、学習者の発話に影響を及ぼすことが予想される。

英語による発話のための概念化を促進する目的で最初に母語で発話をする、そして、先行研究では使用していない開いたタイプのタスクを用いる、という2つの要因が、タスクを繰り返す練習の効果にどのような影響を与えるのか解明しようと考えたのが、今回の研究の着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

発話タスクを2回繰り返す練習と、プリテストとポストテスト（プリテストと同じ内容）を使い、練習前後の発話の変化を調査する。そして、練習の効果に対して、以下の2点を明らかにしようとした。

- (1) 練習時に遂行するタスク（1回目）における日本語使用の影響について
- (2) 練習時に与えるタスクタイプの影響について

3. 研究の方法

研究1年目は、練習時に遂行するタスク（1回目）において日本語を使用することに対する学習者の意識を調査した。大学1年生19名を参加者とし、参加者には物語タスク（6コマ漫画を使ったストーリーを作成し発話する独白タスク）を使ったセッションを週に1度、合計5回与えた。各セッション時に、参加者はまず日本語でストーリーを90秒間話し、自身の音声をICレコーダーに録音した。そして、そのすぐ後、英語で同じストーリーについて90秒間発話しながら録音した。各セッションでは、毎回異なる漫画を用いた。そして、最後のセッション後に、紙媒体のアンケート用紙を使い、「英語でスピーキングする時に、直前に日本語で話した内容をそのまま話そうとしましたか？」と「最初に日本語で話したことが、その後の英語で発話する時に役立ちましたか？」という質問を与え、参加者が日本語による発話に対してどのような意識を持っていたのかについて調査した。

2年目は、日本語と英語を使って発話する練習が流暢さの育成に有効であるのか調べる目的で、2種類の調査を行った。まず、日本語を使って同じタスクを2度繰り返す練習と異なるタスクを2回使った練習の効果を比較した。大学1年生で構成された3つのグループのデータを収集した。グループ1（15名）は、各セッション時に同じ漫画について2回発話する練習を行い、その際、先ず日本語でストーリーを話し、その後英語で話をした。一方、グループ2（15名）は、それぞれのセッションにおいて、異なる漫画のストーリーを1回ずつ英語で発話する練習を行った。そして、グループ3（15名）は比較群とし、セッションを与えなかった。そして、プリテストとポストテストとして、セッションで使用していない漫画を3グループに与え、発話の流暢さ（ポーズの平均的な長さと言語ランの平均的な長さ）についてグループ間の差およびグループ内の伸びについて調査した。さらに、日本語を使って同じタスクを2度繰り返す練習と英語で同じタスクを繰り返す練習の効果を比較した。グループ4（大学1年生15名）は、グループ1同様、各セッション時に同じ漫画について2回発話する練習を行ったが、その際、両方とも英語で発話した。そして、最初の発話が直後の発話に対してどの程度概念化の役割を果たしているのかについて、グループ1とグループ4の4回目のセッションにおける2回目の発話（英語による）を比較し、グループ間の差について調べた。さらに、グループ4には「英語でスピーキングする時に、直前に日本語で話した内容をそのまま話そうとしましたか？何故ですか？」という項目に対する回答をアンケート用紙で求め、アンケート結果と発話との関係性についても調べた。

最終年は、練習時に与えるタスクのタイプが流暢さの発達に及ぼす影響を調査した。研究1年目と2年目は6コマ漫画を使った物語タスク（発話内容が使用する資料内に事前に埋め込まれており、学習者はその内容のみを発話するため、学習者間における発話内容にあまり違いがない閉じたタスク）をセッションとテストにおいて使用した。今回は、1語からなるトピックについて独白するトピックタスクを用いた。調査目的は2つある。1つは、発話する内容は与えられるのではなく学習者自身が考えるため、学習者間における発話内容に違いがある開いたタイプであるトピックタスクを繰り返す練習を行うことが、スピーキング能力の育成に有効であるのかを調査することである。もう1つは、こうした練習により、練習していない閉じたタイプのタスクを発話する際に影響を与えるのか調べることである。実験群（大学1年生12名）には、memory や fashion といった一語からなるトピックについて発話するセッ

ションを与えた。各セッションにおいて、参加者は同じトピックについて2回英語で発話する練習を行った。そして、プリテストとポストテストにおいて、2種類のテスト（セッションでは発話していないトピックを用いたトピックタスクとセッションでは与えていない物語タスク）を与えた。そして、ポーズの平均的な長さや流暢なランの平均的な長さに加え、「AS ユニット間のポーズの平均的な長さ・AS ユニット内のポーズの平均的な長さ・発話の割合」という発話の流暢さに関する指標についてもその変化を調査した。物語タスクの関しては、前年度に採取したグループ3のデータを比較群として用いた。

4. 研究成果

タスク遂行時における日本語使用に対する学習者の意識について、次の3点が明らかになった。

- (1) 参加者の半数が、「毎回英語でスピーキングする時に、直前に日本語で話した内容をそのまま話そうとした」と回答し、発話の繰り返しを実行するかどうかは学習者により異なっていた。
- (2) 日本語の内容を英語で話そうとした参加者は、「スピードが上がった・ストーリーが作り易くなった・文章や構文を意識できた」といったパフォーマンス面に関する効果や「自信を持つことができた」という情意面での効果を意識していた。
- (3) 日本語で話した内容をその後英語で話そうとしなかった参加者は、「日本語で言える表現が英語で言えない」や「英語で発話中、日本語で話さなかった表現が浮かぶ」という理由をあげ、日本語による概念化がその後の英語発話時の形式化にリンクしていない場合があった。

一方、タスク時に日本語を使用した学習者による英語の発話について、次の5点が明らかになった。

- (1) セッション時のポーズの長さに関して、グループ1（同じストーリーを日本語そして英語で発話）の方がグループ2（異なるストーリーを1回ずつ英語で発話）より有意に短かった。
- (2) グループ1とグループ2のポーズの長さは、プリテストよりもポストテストの方が有意に短く、両グループの流暢なランの長さも、ポストテストの方が有意に長くなっていた。そして、ポストテストにおける流暢なランの長さは、両グループの方が比較群よりも有意に長かった。
- (3) グループ1とグループ4（同じ漫画のストーリーを英語2回発話）を比較した結果、セッション時の流暢なランの平均的な長さに関して、グループ4の方がグループ1よりも有意に長かった。
- (4) グループ1とグループ4のポーズの長さは、プリテストよりもポストテストの方が有意に短く、両グループの流暢なランの長さも、ポストテストの方が有意に長くなっていた。そして、ポストテストにおける流暢なランの平均的な長さは、両グループの方が比較群よりも有意に長かった。
- (5) 日本語で話した内容をその後英語で話そうとした参加者の中だけでなく、日本語での発話内容を英語で話そうとしなかった参加者の中にも、練習時の英語での発話とポストテストの発話の両方において、流暢さにプラスの影響が及ぶものとマイナスの影響が及ぶものがいた。

以上の結果から、タスク遂行時の日本語使用の影響について、次の4点が示唆できる。

- ・日本語での発話が直後の英語による発話の概念化を促進し、パフォーマンスや情意面で有効性を感じる学習者がいる一方、日本語による言語化される前のメッセージを英語による言語メッセージに変換できない学習者もいるため、日本語を使った発話の有効性は学習者に左右される可能性がある。
- ・英語で発話する直前に、異なる内容を英語で発話するよりも、同じ内容を日本語で発話する方がその流暢さにプラスの影響を及ぼす一方、同じ内容を発話する際に、先に日本語ではなく英語で発話する方が、直後の英語による発話の流暢さにプラスの影響を及ぼす可能性がある。
- ・どの種類の練習も効果的であり、タスク練習自体が学習者の手続き化を促進する可能性がある。
- ・直接的（易しい日本語表現を英語に変換）あるいは間接的（難しい日本語表現の変換を避け、別の

易しい英語表現を使用)に日本語による発話を利用する学習者がいる可能性がある。

さらに、練習として遂行するタスクのタイプがテストに与える影響については、以下のことがわかった。独白タスク(一語からなるトピックについて発話)を使った練習後に、ポストテストとして同じタイプのタスク(独白タスク)を遂行した場合に関して、2点が判明した。

- (1) 流暢さに関するすべての指標において、プリテストとポストテストの間に変化は見られなかった。
- (2) 両テストで同じトピックについて発話したにも関わらず、ほとんどの参加者(12名中10名)がポストテストではプリテストとは異なる内容について発話した。

一方、ポストテストで練習とは異なるタイプのタスク(物語タスク)を遂行した場合、「ポーズの平均的な長さ」については、プリテスト時には比較群より有意に長かった実験群のポーズが、ポストテスト時には有意に短くなっており、比較群との差もなくなっていた。

こうした結果から、練習時に遂行するタスクタイプの影響について、次の2点が示唆できる。

- ・開いたタイプのタスクを繰り返す練習において、学習者は異なる内容について発話する傾向があるため、タスク繰り返しの練習が学習者の手続き化促進に及ぼす影響は小さい可能性がある。
- ・開いたタイプのタスクを繰り返す練習の効果は、練習をしていない閉じたタイプのタスクを遂行する際に転移する可能性があるため、閉じたタイプまたは開いたタイプのどちらもタスク練習自体が学習者の手続き化を促進し、閉じたタスクを遂行する際にその効果が表れる可能性がある。

学習者がタスクを繰り返す練習をする際に、どのようにタスクをするのか、そして、どのようなタスクをするのかにより、学習者の言語知識の手続き化促進に対する効果が左右されることが本研究結果より示唆できる。今後は、タスクを繰り返す練習の効果に影響を与える様々な要因についてさらに研究を進めることで、授業においてタスクをより効果的に使用できるようになるとと思われる。

<引用文献>

- Bui, G. (2014). Task readiness: Theoretical framework and empirical evidence from topic familiarity, strategic planning, and proficiency levels. In P. Shekan (Ed.), *Processing perspectives on task performance* (pp. 63-94). John Benjamins.
- Bygate, M. (2001). Effects of task repetition on the structure and control of oral language. In M. Bygate et al. (Eds.), *Researching pedagogic tasks, second language learning, teaching and testing* (pp. 23-48). Longman.
- Date, M. (2015). Does Form Instruction During Task Repetition Facilitate Proceduralization and Accuracy of Linguistic Knowledge? *Annual Review of English Language Education in Japan*, 26, 189-204.
- Date M., & Takatsuka, S. (2013). The Effect of Task Repetition and Noticing of Forms on Proceduralization of Linguistic Knowledge, *Journal for the Science of Schooling*, 14, 89-101.
- De Jong, N., & Perfetti, C. (2011). Fluency training in the ESL classroom: An experimental study of fluency development and proceduralization. *Language Learning*, 61, 533-568.
- 江口朗子・田村 祐 (2018). 「タスク性の高いコミュニケーション活動における発話の流暢さの発達 - 大学初級レベルの英語学習者を対象とした実践報告 - 」『中部地区英語教育学会紀要』47, 119-126.
- Ellis, R. (2005). *Planning and task performance in a second language*. John Benjamins.
- Qiu, X., & Yi Lo, Y. (2017). Content familiarity, task repetition and Chinese EFL learners' engagement in second language use. *Language Teaching Research*, 21, 681-698.
- Sangarun, J. (2005). The effects of focusing on meaning and form in strategic planning. In R. Ellis (Ed.), *Planning and task performance in a second language* (pp. 111-141). John Benjamins.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Date Masaki
2. 発表標題 Effectiveness of L1 use for conceptualization in repeating oral narrative tasks
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Date Masaki
2. 発表標題 The effects of a first task performance in L1 during practice using task repetition for developing L2 speaking skill
3. 学会等名 Applied Linguistics Association of Australia (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------